

学位論文審査結果及び最終試験報告書

学位申請者氏名	西村 美帆子		報告番号	甲 第 16 号		
申請学位 (専攻分野)	博 士 (家政学)		専 攻	総合生活専攻		
論文題目	小児肥満症と食行動および血中脂肪酸との関係 一より効果的な栄養食事指導に向けて一					
成 績	論 文 審 査 及 び 最 終 試 験			合 格		
論文審査 審 査 員		氏 名	職 名		氏 名	職 名
	主査	鈴木 敏和	教授	審査員	阿部 百合子	医学博士
	審査員	大石 恭子	教授			
		杉浦 令子	教授			
		長野 伸彦	医学博士			

論文審査の要旨（1600字程度）

本論文は「小児肥満症と食行動および血中脂肪酸との関係 一より効果的な栄養食事指導に向けて一」と題し、五つの章から構成されている。

第Ⅰ章緒言では、「肥満」「肥満症」「メタボリックシンドローム (MetS)」の定義とその評価方法、国内外の小児肥満の現状、成人した後の肥満の比率や健康問題に触れた上で、本研究の目的について、肥満小児の栄養および食生活が身体に及ぼす影響、および小児と成人の MetS との類似性を検討することを述べ、本研究を位置付けている。

第Ⅱ章では、肥満小児を対象に早食いと身体状況および栄養摂取量との関連を検討した。早食いの判定は、簡易型自記式食事歴法質問票の回答より行った。早食いの肥満小児は非早食いの肥満小児比べエネルギー摂取量が多く、ウエスト周囲長と血圧が高値を示した。この結果より、早食いはエネルギー摂取量の増加を起因として、腹部肥満と腹部肥満誘発性の血圧上昇もたらす可能性を示した。

第Ⅲ章では、肥満小児における「早食い」の有無と栄養素および食品群摂および身体状況の関連について、対象者を小学生（6歳から12歳）と中学生（12歳から15歳）に分けて検討した。非早食い群と比べて早食い群は、小学生ではウエスト周囲長と体脂肪率が高値を示し、中学生男子では収縮期血圧が高い傾向を示した。早食い群は、小学生では調味料類（マヨネーズ、ソース・しょうゆ）、中学生では穀類（特に米飯）および乳酸菌飲料の摂取量が非早食い群よりも多かった。また、早食いの有無に関係なく、小学生と中学生でともに野菜類およびきのこ類の摂取量が少なく、総食物繊維量が不足していた。また、早食いの中学生において、米飯摂取量は収縮期血圧および血清中性脂質 (TG) 値と正の相関を示した。さらに、収縮期血圧や TG 値が、血中インスリン濃度やインスリン抵抗性と関連することを示した。以上の結果を総合し、早食いに関連する食品の過剰摂取が、収縮期血圧の上昇や血中 TG の上昇、およびインスリン抵抗性の増長に關与している可能性を示した。

第Ⅳ章では、肥満小児の MetS の判定と血清脂肪酸濃度およびアディポサイトカイン濃度の測定を行い、血清中の n-3 系多価不飽和脂肪酸 (n-3PUFAs) 対 n-6 系多価不飽和脂肪酸 (n-6PUFAs) の比率 (n-3/n-6 比) と肥満や代謝異常との関連を検討した。非 MetS 群と比較して、MetS 群は肥満度、ウエスト周囲長、収縮期血圧、拡張期血圧が高値を示した。また、血清 n-3PUFAs および n-6PUFAs 値、および n-3/n-6 比は低値を示し、TG 値、インスリン値、空腹時血糖値、飽和脂肪酸値、一価不飽和脂肪酸値、レプチン値、レプチン/アディポネクチン比が高値を示した。以上より、MetS 小児における将来の心血管疾患予防には、n-3PUFAs を豊富に含む食品を積極的に摂取することが有効であると考察した。

第Ⅴ章総合考察では、**第Ⅱ章**から**第Ⅳ章**の成果を基に、小児肥満の改善に向けた効果的な食生活のあり方について、総合的な考察を行った。早食い予防の方策や n-3PUFAs を多く含む食品の積極的摂取を中心に、具体的かつ実践的な栄養食事指導を提案した。

以上、本論文は小児肥満の食行動、特に早食いと摂取食品に焦点を当て、重要な知見を与えた。さらに、総合考察を通じて小児肥満の改善を目指したより効果的な栄養食事指導を具体的に示したものである。よって本論文は博士（家政学）の学位請求論文として合格と認める。